

まことの神との出会い

篠田 一志

## 序章

いま、ためらっています。転校が多く、楽しい思い出が少ない小学校時代、両親の離婚を経験した中学時代など、思い出したくない過去があります。病気で次女を奪われた苦しみを正しく言葉に表すことができるだろうかと言った不安もあります。すべて、自分史を書くことのためらっている材料です。でも、ためらっている一番の理由は皮肉にもキリストとの出会いでした。

キリストと出会ったのは四〇代後半です。結婚もし、子どもも生まれ、仕事にも恵まれ、ごく平凡な人生を歩んでいました。もちろん、夫婦のトラブルもあり、家族にとっては堪えがたい次女の死も経験し、それは順風満帆でないにしても、人並みの人生が過ごせるとの自負がありました。が、見事に砕け散りました。

あるとき、気づくと家族の関係、職場の人間関係が壊れていたので。あれこれ考えて修復を試みるも傷口はますます広がります。自分の力では修復できないことを認めたと、まさにキリストに出会ったときでした。

でも、人生の大半を過ごしてからの出会いです。壊れると知っている人生の歩みを人前にさらすなどできません。ためらう心は大きく膨らみ、わたしのなかに居座って動こうと

しないのです。

自分史に向き合うのですが、なかなか一步前に踏み出せないでいますと、異教とは言え信仰を熱心に求めていた両親の姿と、その両親のもとで生まれ、育った幼いころの自分の姿が目の前に迫って来たのです。すると、両親はなぜ、キリストに出会えなかったのか、なぜ、熱心な異教徒の両親に育てられながらも、いままで異教徒の自覚のないままに生きていたのか、なぜ、人生が壊れる前にキリストとの出会いがなかったのか、次から次へといろいろな疑問が噴き出すではありませんか。

やがて、落ち着き、静かなときを迎え始めました。疑問に思ったことが不思議な事実であり、その不思議が神の御意志と思えたとき、神は絶望の人生を希望に変えてくださるだけではなく、キリストとの出会いまでもご計画されておられたお方だと気づかされたのです。すると、いままで書くことをためらっていた「人生」は、神さまがご計画され、導いておられると確信しました。

自分史は、自分に焦点をあてたら、ためらいがあって書けません。が、神がご用意された人生、つまり、神に焦点をあてた自分史として作品にするチャレンジだと思ったら、自分史を探る旅に出発する喜びと勇気が与えられたのです。

一章 異教のなかで (一)

親から良く聞かされていたエピソードがあります。赤ん坊のわたしが、原因は判りませんが突然ミルクなど口にするものを一切受けつけなくなりました。途方に暮れた両親は何を思ったのかイチゴと砂糖をまぶしたミルクを与えますと、いままで何も受けつけませんでしたのに、そのミルクを口に含み喜んで飲み干したそうです。イチゴとミルクがいのちを救ったと言うエピソードでした。

このエピソードには、幼少期の自分史に欠かせない事実が隠れていました。奈良県に本部を置く宗教法人天理教の修養会に両親がそろって参加していたときの出来事だったので、現在、天理教の修養会は信徒教育的な機関ですが、当時は、教師育成機関でしたから、二人はそろって天理教の教師を目指していたことになりました。つまり、わたしは熱心な天理教信徒のあいだに生まれた子どもだったのです。

両親の熱心な信徒ぶりは、わたしが小学校に入学してすぐに転校を伴う引っ越しが物語っています。引っ越し先は広い庭のお屋敷で、一人の老婦人が教会長として住んでいる天理教の教会でした。つまり、生活のすべてを信仰に奉げる信徒だったのです。

教会での両親は朝から晩までいつも黒の法被姿でした。毎朝、教会の屋敷と庭の掃除、

老婦人とわたしたち家族の食事の支度をし、終えると教会長の老婦人が加わって、朝のお努め（礼拝のようなもの）が始まるのです。事の成り行きは忘れましたが、わたしも加わったのお努めでした。老婦人が真ん中で拍子木を、わたしはその横でちゃんぽんと言った小さなシンバルをたきます。父は大太鼓を、母は確か立って踊っていました。お努めの時間は小一時間程度で、終わるとわたしは食事をして学校へ行くのです。お努めは学校の休みに関係なく毎日ありました。間違いなくわたしの幼少期は天理教と言う異教のなかで立派に過ごしていたのです。

しかし、わたしの記憶には、天理教のことより、入学して間もなく転校したことの戸惑いのほうが強く印象に残っています。越境通学だったのでしよう、近所に同じ学校の友達が一人もいませんでした。また、学校がやたら遠く、自転車で三〇分以上もかかり、それがつらく、途中にある神社で良くサボっていました。当然、サボることが多くなりますと、学校に馴染めない、学校が面白くない、学校に行きたくない、またサボると言った「負のスパイラル」が始まっていたのです。でも、そんな生活も一年ほどで終止符を打つことになりました。大きなお屋敷の教会から二間の小さな、それも隣が壁一つつながっている長屋に引越すことになったのです。

## 二章 異教のなかで（二）

引っ越し先は、学校から歩いて五分の近場で、近所には同じぐらいの子どもも多く、もう遠くに通うのがつらくて学校を休むことも、一人さびしく遊ぶこともなくなったのです。両親の生活も変わりました。

母は朝から晩まで庭で竹を割き、父は母が割いた竹をリヤカーに積んで朝早く出掛け、夜遅く帰って来ます。昔、家の土壁を塗る下地に、木舞（こまい）と称して細い割り竹を縦横にからめ、それに壁土を塗りつけて、さらに仕上げの壁材を塗るのですが、仕上げの壁を塗るのが左官屋、その下地の竹を組むのが木舞屋（こまいや）と呼ばれ、両親はその木舞屋（こまいや）の職人として働くようになったのです。

法被姿の両親を見ることも、朝のお努めもなく、我が家から天理教の香りが一切消え去ってしまいました。

引っ越しによってわたしの周りは大きく変わったのです。しかし、この暮らしも一年ちよつとで終止符が打たれ、学校にも、生活にも馴染めないままに、新たな場所に引っ越し・転校することになりました。その後も何回かの引っ越しがあり、やたら引っ越しが多かった子ども時代だったことを強く覚えていきます。

自分史を書くためらいがこの記憶にあると思ったとき、長屋に住み始めたころのある一つの情景が甦（よみがえ）ってきました。学校から帰宅しますと、母が学校の様子を聞くのです。その顔は笑っていました。その笑顔がうれしくて、先生が嫌いなこと、級友が不親切なことなど、学校に馴染めないつらさを吐き出すように話していますと、母の様子が変なのです。いままであった笑顔がすっかり消えていました・・・。

いままで、母の笑顔が消えた原因を詳しく知ろうと思ったことはありません。でも、長屋への引越しはわたしの学校のためと気づいたとき、母にとって引越しは「天理教から離れることではないか」との思いが強く迫って来たのです。その途端です「信仰から離れた母にとって生きる張り合いは、わたしの喜ぶ笑顔ではないか。しかるに、母の目の前には、不平不満で顔をゆがましているわが子がいる。母に喜び、平安の心が生まれるだろうか。もちろん、否！」三段論法のように母の笑顔が消えた疑問が解き明かされていくのでした。

真実は判りません。両親はもうこの地上から去っているので聞くことができません。でも、自分史に向き合うことがなければ、いままでわたしの力では気づくことも、想像することもできなかつた両親のそして母の愛に触れることはなかつたと思いました。

### 三章 異教からの解放

中学生活も終盤を迎え、高校受験追い込みの真つ盛り的时候了。父が「南無妙法蓮華經」と拝むことを勧めてきました。先ごろ、天理教から離れ、新たな宗教として創価学会に入信した父は、受験に必死に向き合っているわたしを見て、いまがその宗教を勧める最善の機会と思つたようです。

勧められるままに学校に行くときと、帰ったときに仏壇の前で「南無妙法蓮華經」と三回唱えることにしました。また、日々の習慣にもなつたのです。ただ、信仰心ではなく親の言いつけを守りたいとの思いから生まれた習慣だつたと思います。

はたして、受験は合格しました。けれども、とても喜ばませんでした。忘れもしません、合格発表、その日に二つの結果を知ることになりました。一つは受験結果ですが、もう一つは両親の離婚だつたのです。そのとき、何が原因なのか判りませんでした。だが、宗教が深く関係していると反射的に思つたことを、いまもはっきり覚えています。無論、確証はないのですが・・・。

その後、父は再婚をしてわたしは父方に引き取られたのですが、どうしても理解できないことがあります。別れた両親が離婚後も創価学会員としてつながって、一緒に仏壇に

向かつて拝んでいる姿です。特に、一心不乱に「南無妙法蓮華経」と唱えながら仏壇に向き合っている母の姿を見て、なぜだか、切なさが入み上げていました。同時に、両親を飲み込んでしまった宗教に対してどのように向き合えば良いのか判らぬままに、毎日仏壇に向かつて拝んでいる自分にも腹を立てていたのです。

そんなある日です。吉川英治の小説「宮本武蔵」を読んでいますと、有名な一乗寺決闘の場面になりました。決闘場に向かう途中に八大（はちだい）神社前を通りかかった武蔵は足を止め、必勝祈願に拝殿の鈴を振ろうとしましたが、そのとき何かを悟ったのか、頭をさげたのみで立ちさるのです。この悟りこそ、良く知られる「神仏を尊んで神仏に恃（たの）まず」でした。思わず「これだ」と叫びました。すると、いままでわたしのなかの宗教に対する「モヤモヤ感」が一掃されたのです。その日から仏壇の前に座ることも、「南無妙法蓮華経」と唱えることも一切なくなりました。

両親は信仰に救いを求めながら、イエスさまに出会わずにこの地上を去っていきました。神仏から離れることを願っていたわたしは、長い時間が必要でしたが、イエスさまに出会うことができました。その理由は判りません。選びは主にあるからです。

主よ。熱心に救いを求めていた両親をどうか憐れんでください。アーメン。

#### 第四章 イエスさまとの出会い（一）

神仏に頼る生き方から離れたのは高校生のときです。そのときは、ただ離れたい一心でした。しかし、時の流れは「何」を信じて「何」に頼るといふ、明確な「何」を持たずに生きていくことに、不安を抱かせるのです。

妻との結婚はそのようなときでした。当時（二二歳）、生活基盤が不安定と知りながらも妻との結婚を強く望みました。妻のご両親は、わたしとの結婚に不安を抱いていたと思います。妻も同じだったかもしれませんが、結婚を承諾してくれました。妻の決断は、わたしのなかにあつた不安を一掃してくれました。改めて、「神仏を尊んで神仏に恃（たのまず）」の意を強くしたのです。

就職はその一歩だったと思います。入社し、配属先は事務処理の機械化のために新設されたコンピュータ部門でした。当時（一九七三年）コンピュータは世の中に浸透していません。社内も同じで、新人もベテランも、みな慣れないコンピュータ相手に悪戦苦闘していたのです。わたしもコンピュータと昼夜の別なく向き合っていました。二〇代、三〇代、仕事とともに時を重ねると自分の力を信じる生き方が当たり前になっていました。きつと、コンピュータから正しい結果を導くのは人間の力しかなないと強く実感していたから

だと思えます。しかし、やがて・・・。

この「当たり前」は妻や家族には「家庭を顧みない」ただの仕事人間にしか見えていなかったことに気づかされたのです。次女が五歳のとき（二歳のとき重い脳疾患に罹（かか）り、以来入院生活をしていました）、その次女がはじめて自宅療養に移り変わるとき、妻が突然別居を切り出したのです。自宅療養が許されたとはいえ、痰の吸引、床ずれ介護などが必要な重度障害一級の次女をはじめて自宅に迎えるときでした。申し出の理由は「次女をケアするのにわたしの存在が負担になる」とのことです。そのとき、妻の真意を受け止める余裕はありませんでしたが、「当たり前」になっていた生き方が妻や家族を苦しめていたことだけは判りました。最終的には、次女に何かあつたらすぐに駆けつけられる距離に、アパートを借りて別居することになりました。

しかし別居を切り出されたときはほんとうに驚きました。が、いま振り返ると私たちにとってそれが最善な道であつたと思います。妻は次女の介護に専念し、わたしは仕事に集中しました。いままで次女のこと、相手のことを見る余裕がなかった夫婦にその余裕が生まれました。なによりも、はじめて取り組んだ次女の自宅療養が無事に定着したことです。定着こそ次女の容態が安定していた証（あか）しであり、次女の安定は妻の心の内を映し出した鏡だと思ふからです。はたして、別居は一年後に解消になりました。

## 五章 イエスさまとの出会い (二)

一九八七年三月、別居を解消してわたしと家族は再び歩み始めたのです。そのとき、新たに向き合う課題が与えられました。一つは教会生活の始まりです。別居によって妻が近所の教会で洗礼を受けていたことを知りました。その教会にわたしも通うようになったのです。そのときは、求道者と言うより家族を教会に送り迎えする運転手ぐらいの自覚だったと思います。はじめて妻に連れられてその教会に行ったとき、教会の皆さんがつぎつぎに次女に向かって声をかけてくださいました。次女はもちろん、妻も長女もうれしそうにそれに応じているのです。まるで妻たちが教会という家族の一員のように驚きました。いま思えば、その光景こそ妻たちが神の家族である祝福の証（あか）しだと思っています。

二つ目は自分の家を持つ決心です。自宅治療が安定した次女にとって風呂場は大切な生活空間になりました。当時、社宅なので風呂場の改造を試みるも限界があり、必要な空間を作るには自分の家を持つしかないと思っただけです。しかし、次女が近々に控えている村山養護学校への入学を考えると東京都都在住が限定され、当時三〇代のわたしの経済力で適当な物件を探すことに自信がありませんでした。そんなとき、新聞のチラシ広告で手が届きそうな分譲物件が東京都青梅市にあることを知り、さつそく不動産屋を通して現地に向

かったのです。現地はまだ更地でしたが、近くに流れる多摩川と周りの景色の美しさは切り取って絵葉書にしたいほどでした。その景色にいつぱんに魅了されたわたしと妻は即座に青梅に住むことを決心したのです。

一九九〇年三月、次女の養護学校入学を機にわたしたち家族は社宅のある三鷹から青梅に引っ越ししました。妻と次女は養護学校を中心にした生活の始まりです。中学生の長女は転校先で二年生の新学期を無事に迎え、わたしも通勤時間が心配したほどではなくホッとしました。また、引っ越してすぐに、真向かいに住んでおられる方がクリスチャンであることを知り、新たに通う教会の心配が消えたことも感謝でした。こうして、青梅での生活は順調に滑り出したのです。

しかし、この生活もすぐに終わりが来ました。二年目を迎えたとき、次女が天に召されたのです。二歳のとき脳腫瘍の手術をし、腫瘍の全摘が適わず、医師から「五年を一つの目安に見守っていきましよう」と言われていましたので覚悟はしていました。が、そのとき、その現実をどう受け止めていたのか覚えていません。ただ、仕事が忙しい時期でしたので、家族と一緒に教会に行くこともせず、仕事に没頭して何日も家を空けることが多くなり、家には寝に帰るだけのような生活でした。それは、自分の心の渇きばかりを見て、妻や長女の悲しみに心を向ける余裕がない愚かな自分であったことは覚えていません。でも、

このような生活は長くは続きませんでした。

一九九七年二月、東京都の難病指定のネフローゼ症候群と言う病名で三カ月の入院を余儀なくされたのです。だが、入院は立ち止まって自分を見つめるために与えられた恵みの時間になりました。妻が通っている教会の牧師が入院している病院の近くに住んでいたこともあり、毎日のようにお見舞いに来てくださったのです。それは、大きな助けであり、励ましでした。牧師は夜、決まった時間に来てくださり、だれもない待合室の片隅で二人だけの交わりのときを持ってくださいました。ある交わりのときです。「洗礼は到達点ではなく出発点ですよ」と言う牧師の言葉が心に響きました。「キリストの復活」が受け入れられずに足踏みしているわたしの背中を強く押ししてくださいました言葉になったのです。間もなくして、洗礼を受ける決心が生まれました。その日から夜の待合室はわたしの洗礼準備会の間になったのです。

いまにして思えば、洗礼の決心は次女の死によって、ぼっかり空（あ）いた穴を埋めたのかも知れません。でも、妻をはじめ多くの方々の祈りと支えによって、闇に向かつていたわたしが光のほうに向きを変えて歩み始めたことは真実です。そして、これらすべてのことをご計画し、ご支配なさっているお方こそ、いまもわたしのなかで生きておられる主であり、まことの神であると確信しています。

## 六章 新たな旅立ち

一九九七年に受洗しました。

歳月は過ぎ、二〇〇五年某日、長女から突然一通の手紙が手渡されたのです。何かただならぬ気配を感じていますと、しばらくして娘と妻が「これから妻の実家に行く」と言つて、二人で家を出て行ったのです。否も応もありませんでした。

しばらく呆然としていましたが、気を取り直して娘の手紙に目を落としますと、そこには家庭を顧みないわたしに対する怒りと憤りが娘の正直な言葉で埋まっているのです。

読み終えた途端「同じだ・・・」と嘆息しました。救われる前と何も変わっていません。自分のことしか考えない古い自分であり、娘との関係がこれほどまでに壊れていることに気づかない鈍感な自分を知りました。

また、妻の実家に妻と娘がずっといることを恐れ、さりとて娘との関係回復に向き合う勇氣もなく、いまの状態を取り繕うかのように妻と娘は家に戻し、自分は逃げるように家を出て、アパートを借りると言う安易な決断をしたのです。

何一つ変わらない自分なのですが、一つだけ不思議な自分がいました。

家族からも、母教会からも離れる決断をしたのですが、しきりに礼拝の場を求めます。いままでは仕事が忙しいと言って礼拝は二の次にしてきましたのに、ほんとうに不思議でした。

ある日曜日の朝、三年前、札幌に単身赴任していたとき、インターネットで知った教会を思い出したのです。教会はなんとアパートからそう遠くありませんでしたので、すぐに身づくろいをして聖日礼拝の場に向かいました。

そのときの礼拝メッセージの概略は「イエスを裏切ったペテロとイスカリオテのユダがどのような人生を歩んだのか、ペテロは初代法王の道、ユダは自殺へと、その歩みの違いはイエスさまとの距離の差です」と言う内容で、そのとき、決してユダにはなりたくないと思つたことを覚えています。

しばらく、その教会に通っていると、「弟子訓練」と言う信徒訓練プログラムが一年かけて始まることを知り、参加を申し出ました。いま思えば、参加することに、不思議と迷いもありませんでしたし、会社の休職制度が利用でき「弟子訓練」に集中して取り組めたことも感謝でした。

「弟子訓練」のメンバーは神学校を出て、なぜか教会を離れ、再びつながった三〇代の兄弟、女子大生、二〇代の商社マンとわたしの四人です。世代間ギャップを心配していましたが、その心配も取り越し苦労だったようで、楽しい交わり・学びの場でした。

「弟子訓練」も終わりに近づいたころ、牧師から「老人ホーム入所を機に教会で礼拝を断念された九〇歳の姉妹がおられますので、週報を渡し、教会の近況をお話しするなど、ちよつとした交わりの時を持ちませんか」と勧められたのです。

休職中だったこともあり、またホームがアパートの近場でもありましたので、「弟子訓練」の一つと思ひましてお受けいたしました。

それからは、定期的に週一回、姉妹のところにお邪魔するようになりました。

お邪魔したある日、姉妹から「最近物忘れが激しいので何か良い防止策はないかしら」と相談を受け「暗誦聖句などがですか」とお答えしたのです。

すると、興味を示されながらも「一人でぶつぶつ言っているようで変な人と誤解されなにかしら」と、一步踏みとどまっておられるご様子でしたので、励ます意味も兼ねて「一緒にやりましょうか」と言ったところ、その言葉を待っていたのでしよう。姉妹は「是非とも暗誦したい聖句があります」と即座に応じられました。詩篇二三篇でした。

早速にも、二人で聖句暗誦に取り組むことになったのです。

一く六節の短い詩篇ですが暗誦して身に着けるにはそれなりの備えが必要でした。休職中で毎朝近所の公園を散歩するのが日課でしたので、人影のない場所で声を出して覚えることにしました。

そんなある日のことです。いつもの通り、一節、二節と順に唱和し、五節目の『私の敵の前で、あなたは私のために食事を整え、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています』のところに来たときでした。何か心のなかに暖かいものが入ってきたのです。思わず「いまのわたしでも、あなたの整えてくださる食事に預かってもしっかりいのですか」と問いかけました。

しばらくの沈黙があつたあとで「今のままでも良いのだ」と熱い思いが内から湧いてきました。それは確かに内なる聖霊の声でした。神はそのままのわたしを受け入れてくださったのです。それは「クリスチャンになっても何も変わらない」との負い目が取り除かれた瞬間でした。

現実には依然としてわたしの周りには多くの課題があります。娘との和解、職場復帰、母教会との関係など、何一つ解決していません。しかし、いまわたしは最も大切な課題の

解決が与えられたのです。それは神さまとの関係の回復です。

もし、ユダにもイエスさまとの関係の回復が与えられたらあのような破滅への道を歩むことはないと思いました。

改めて、洗礼のとき牧師が語ってくださいました「洗礼は到達点ではなく出発点です」との言葉を思い出しました。いま、わたしは再び出発点に立っていると確信しています。

自分史は人生を映し出す鏡のようであり、そのなかに神さまの摂理、人知を超えた神さまのご計画、導きを見ると、その不思議さには驚かされます。たとえば、信仰の選択です。神仏とのかかわりを断ち、社会に羽ばたいた喜びはいまも忘れません。気づけばいまのわたしはイエスさまと出会い、救われた喜びを証しているのです。

一方、異教とは言え若いときから信仰に人生を捧げ、離婚までも厭わず信仰に救いを求めた両親は、イエスさまに出会うこともなく地上を去っていきました。キリスト・イエスを救い主として選択することは、だれの人生においても大きな意味を持つと思います。その選択はわたしたちにはなく、神さまだけにあつたのです。

神さまはわたしの自分史のなかに三つの不思議なみわざを現してくださいました。そこから学んだことは、第一に、神さまは過ぎ去った事実を変えるのではなく、その事実を見る心を変えてくださったことです。

母親が幼いわたしに取ったある言動が理解できずにいままで「しこり」になっていて、忘れたい事実であり触れたくない事実でした。しかし自分史はその事実をなかったことにはせずに、「しこり」を母親への愛と憐れみの思い出に変えたのです。変わったのは事実で

はなく、わたしの視点でした。

二つ目は、働いてくださったのは神さまであり、わたしではないのです。実は、自分史を書き上げるとき、区切りの良いところで妻から意見をもらいました。あるとき妻から「両親に対しての憐れみを感じるよ」と言う言葉に驚きました。自分史は飾ることなく、素直な気持ち、思いを言葉にしてみました。妻はそのなかに神さまの愛と憐れみを読み取ったのです。思わず、これはわたしではなく、わたしの内に働く神さまによつて紡がれた言葉だと思いました。

三番目は、いつもみことばに導かれたことです。作品が進まないとき必ずみことばに立ち返ります。みことばが与えられないときは、いくらがんばっても作品は進まないのです。これらはほんとうに不思議な経験でした。

最後に、自分史の最大の収穫は、救われる前の人生に十字架の愛を見たことです。はじめ、わたしは自分史を書くことに消極的でした。救われる前の人生を人前にさらすことに恐れがあったからです。しかし、筆がどんどん進むのです。それも、わたしが恐れていた過去や忘れ去りたい出来事が作品として出来上がっていくのです。愚かだと思っていた人生が神さまの御力を証（あか）しするものになっているのです。それこそまさに十字架の愛であり、赦しの愛だと思いました。

## 愛誦聖句

\*詩篇 一六篇八節 新改訳第三版

私はいつも、私の前に【主】を置いた。【主】が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。

\*詩篇 二三篇三節 新改訳第三版

主は私のたましいを生き返らせ、

御名のために、私を義の道に導かれます。

\*イザヤ四五章二二節 新改訳第三版

地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ。

わたしが神である。ほかにはいない。

## 愛唱賛美歌

\*讚美歌二一・四八四

主われを愛す、主は強ければ

\*讚美歌三二二

いつくしみ深き友なるイエスは